 明治学院は2013年 創立150周年を迎えます

歴史資料館

ニュースレター

No.4 明治学院歴史資料館 発行

1. 資料館レクチャーコンサート《ヨブ》
2. 寄贈資料紹介 中川嘉兵衛・中川愛咲
3. 新着資料紹介
4. 資料館展示の変更
5. 他館との協力
6. 資料館制作の復刻版

明治学院歴史資料館 レクチャー・コンサート
 安部正義 オラトリオ《ヨブ》
 日本人の手による最初のおラトリオー
 37年ぶりの復活



主催：明治学院歴史資料館 電話5421-5170
 共催：明治学院大学キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会
 キュスターヴ・ドレ “Job Hears of His Ruin” 明治学院大学図書館蔵

2012年11月17日(土) 13:30 開場 14:00 開演
 明治学院大学白金校舎 パレットゾーン・アートホール

1 資料館レクチャーコンサート安部正義 《ヨブ》—日本最初のおラトリオ—



戦前に明治学院の教授をつとめた作曲家、安部正義（あべ・せいぎ 1891～1974）の代表作オラトリオ《ヨブ》。「日本最初のおラトリオ」という歴史的作品であり、1967年5月に明治学院チャペルで初の全曲演奏が行われた本学と所縁の深い作品である。

今回は解説を含めた抜粋演奏であるが、1975年以来37年ぶりの再演となった。

講師はオラトリオ演奏の専門家である西南学院音楽主事の安積道也氏（1996年心理学科卒）がつとめ、《ヨブ》のあらすじを紹介しながら、自らの指揮で実際に全曲の半分にあたる14曲を披露した。演奏は佐野千春氏（ソプラノ）、金田久美子氏（メゾソプラノ）、石川洋人氏（テノール）、小藤洋平氏（バリトン）、小田桐貴樹氏（バス）の声楽家5名と、寺嶋千紘氏のピアノ伴奏で行われ、合唱曲も重唱でこなすという小編成による演奏である。ただし、実力者らによるサロンのアンサンブルは、音楽の骨格をより明確に浮き彫りにし、むしろ楽曲の本質的な魅力に触れることができた。

アンコールでは讃美歌《馬槽のなかに》の旋律でも知られる《ヨブ》のメインテーマを来場者全員で唱和し、感動のうちに幕になった。悪天候にもかかわらず、約250名の来場者に恵まれ、本企画に対する関心の高さを実感した。また安部家関係者が10名を超えて列席され会に華を添えた。当日の演奏楽器は本学同窓会副会長・竹越浩一氏（1968年経済学部卒）が経営するヤマテピアノ社の尽力で、ライブツィヒのブリュートナー社の名器「Model 4」を使用させていただいた。

OBの暖かいご協力を感謝申し上げたい。 加藤 拓未（歴史資料館研究調査員）



安部正義 《ヨブ》の自筆楽譜収蔵

歴史資料館にオラトリオ《ヨブ》の自筆楽譜及び総譜が所蔵された。作曲は戦前明治学院で教鞭をとっていた安部正義（1891～1974）である。

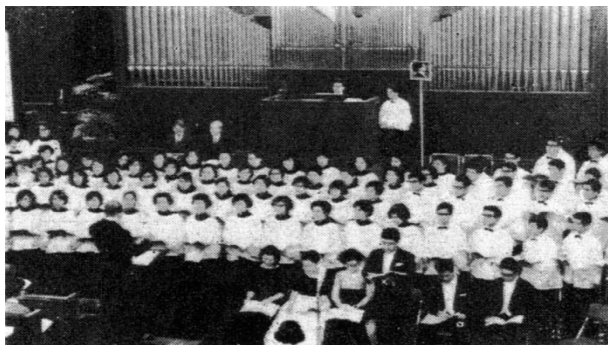
■安部正義と《ヨブ》

安部正義（あべ せいぎ）は東北学院中学部を卒業後渡米し、1913年にボストンのニューイングランド音楽院に入学、13年間の留学生活を経て1926年に卒業し、同年8月に帰国した。留学時は管弦楽作品が評価され、特に管弦楽組曲《小川のほとりに》と《橋の上にて》の2作品は、1924年にボストン・ポップス・オーケストラによって演奏された。

1928年、安部は明治学院高等商業部教授に就任し、音楽の授業や礼拝の奏楽などを担当した。このとき、かねてより強く共感を抱いていた旧約聖書『ヨブ記』の音楽化を決意し、1930年から作曲に着手した。戦時中は空襲により防空壕に入るときも、作曲中の楽譜やスケッチ帳を肌身離さず持っていたという。

1944年、安部は明治学院を定年退職し翌年に終戦を迎えた。この頃、約15年の歳月を経て、ついに完成したのが「オラトリオ《ヨブ》」。日本最初のオラトリオ誕生の瞬間である。

曲は完成したが出版は遅れ、1965年12月、安部が74歳のときに《ヨブ》のピアノ・ヴォーカル・スコアが刊行された。2年後の1967年5月、池宮英才（1924～2003）を常任指揮者に迎えていた「明治学院大学グリークラブ」が、学院のバックアップのもと白金チャペルを会場として、この日本最初のオラトリオの全曲初演を敢行した。



《ヨブ》は本来オーケストラ伴奏で演奏する作品だが、このときは当時チャペルに設置されていたヴァルカー社のパイプオルガンを使い伴奏した。《ヨブ》が本来のオーケストラ伴奏

の形ではじめて演奏されたのは、その2年後の1969年5月、東京文化会館での演奏会である。日本基督教文化協会の主催のもと、複数の演奏団体が参加した大規模な公演となり、池宮英才は企画から演奏までの総指揮を取った。本学グリークラブの参加はなかったが、翌月に本学チャペルにて《ヨブ》の単独再演を行っている。

1974年に安部正義は83歳で逝去されたが、グリークラブは作曲者の一周忌を記念して、1975年にも《ヨブ》を演奏している。

■オリジナルな オラトリオを持つ明治学院

「オラトリオ」とは17～18世紀に主としてヨーロッパで発展した宗教的・道徳的な内容を題材とする劇音楽である。一般に合唱や管弦楽を編成に持つ大規模な作品であるため、宗教曲における「横綱」のようなイメージもある。

オラトリオは現在でも、クラシック音楽の主要ジャンルの一つとして愛好され、日本ではヘンデルの《メサイア》がよく知られる。年末には、ベートーヴェンの《第九》と並んで《メサイア》は演奏会のプログラムを賑わせ、特にミッション系大学や音楽大学などでは、毎年の恒例行事として競うように《メサイア》の演奏を行う。首都圏では、芸大・立教・青山・東女大・昭和音大・フェリスなど、思い浮かべただけでも、けっこうな数となる。

古くからキリスト教の伝統が土台にあるオックスフォードやハーバードなど欧米の名門校は、教員や卒業生の作曲によるオラトリオ作品を持っていても不思議ではない。しかし、この日本において「オリジナルなオラトリオ」を持つ学校は、さすがに他にはない。

独自の芸術作品が明治学院で産声を上げ、現在に伝わっているのは、音楽を重んじるキリスト教主義教育を掲げ、150年の長き伝統を積み重ねてきた明治学院ならではのことといえよう。

■《ヨブ》研究のきっかけ

オラトリオ《ヨブ》は1975年を最後に演奏が途絶え、人びとの記憶からも薄れていった。

私は本学の芸術学科さらに大学院文学研究科でドイツの宗教音楽を専攻し、音楽研究を専門としている。10年ほど前からこの《ヨブ》の歴史的な重要性に気づき、本格的に研究したいと密かに思っていたが、期せずして3年前から歴史資料館の研究調査員となり、《ヨブ》の研究に着手できることになった。

2010年暮れ、歴史資料館のスタッフとともに故安部正義邸を訪問した。出迎えてくださったのは、安部正義の令息、安部正春氏と夫人の登美子氏である。ご夫妻の「父の《ヨブ》を研究してくださる方が、いつか現れるのではないかと待っておりました」という歓迎の言葉とともに、二箱のダンボール箱が運び出された。1点1点資料を箱から出しながら確認してゆくと、ついに最重要資料——《ヨブ》の自筆楽譜がその姿を現したのである。

■ 《ヨブ》の自筆楽譜の発見

安部邸に残されていた《ヨブ》に関する自筆の資料は①スケッチ19点、②草稿譜1点、③自筆総譜1点、④パート譜一式の4種が確認できた。

「スケッチ」とは、作曲家が思いついたアイデアやメロディを記入しておくメモ書きのようなものである。どちらかという作曲家のプライベートに属するもので、途中で着想を破棄したりすることもあり、書かれた内容が必ずしも完成品に活かされるとは限らない。しかし、そのような試行錯誤の形跡から、作品構成の意図がうかがえることもあり、重要な資料である。

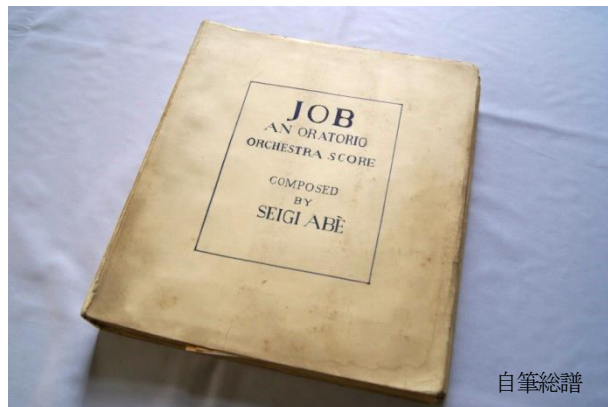
「草稿譜」は、完成に近い状態の楽譜だが、あくまでも「仮組み」のようなものである。そのため足りない部分を加えたり、不要な部分を削ったりなど、決定稿へと至る推敲の跡がうかがえて、作品の成立史を考察する上では、またとない資料と言える。



「自筆総譜」は1964年に作成された浄書譜

で、ブルーブラックのインクで実に美しく仕上げられている。この総譜は、《ヨブ》の木・金管楽器、打楽器、弦楽器、声楽とすべて声部が示された「完全体」である。ただし《ヨブ》は1945年頃に完成したので、1964年に成立したこの資料は、「完成当時」のものではない。

つまり、この自筆総譜は、これ以前にあった古い総譜（おそらく1945年頃のものを「清書」したもので、清書の手本となった方の総譜は見当たらないため、残念ながら失われてしまったようである。



「パート譜一式」は、1969年5月に《ヨブ》が、初めて完全な編成で演奏された際に準備され、各楽器奏者の演奏すべきパートを「抜書き」したものである。各種一部ずつすべて自筆で作成されている。パート譜には各奏者の書き込みなどがあり、演奏時の様子を生々しく伝えるドキュメントである。



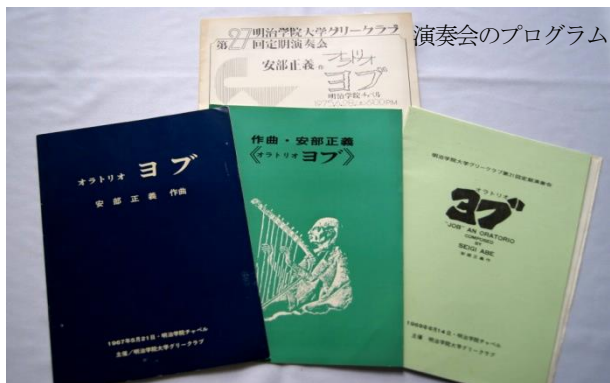
安部家訪問の時点で、召天後36年が過ぎていたことを考えると、自筆資料が残っていたことは幸運というほかない。安部家のご好意により、2011年にすべて歴史資料館に寄贈された（詳細は本ニューズレター第3号を参照）。

■ 続々と集まる《ヨブ》の資料

安部邸で見つかった自筆資料以外にも、《ヨブ》に関する様々な関連資料がつぎつぎと見つかっている。過去においては《ヨブ》の「全曲演奏会」が明治学院チャペルで3回・東京文化

会館で1回、「抜粋演奏」が文京公会堂で1回行われたが、演奏に関連する資料は、かなり多く現存していることが判明した。

楽譜の資料に関しては、過去の全公演で指揮を執った池宮英才（元東京女子大学教授）が、実際の演奏で使用したものが残っている。本学グリークラブとの演奏会で使用した出版楽譜（1967、69、75年の3回）、そして1969年5月に東京文化会館で《ヨブ》をオーケストラ伴奏で演奏した際に使用した指揮者用の総譜（スコア）である。



上記すべての演奏会のプログラムも現存し、独唱者など当時の出演者を特定する上で重要な資料になる。そして驚くべきことだが、1969年5月の東京文化会館の公演を除いて、演奏録音も残っており、明治学院チャペルにおける全曲初演の演奏（1967年5月）を、実際にいま聴くことができる。

こうした音源資料は、いずれもオープンリールテープの形態で、当時の出演者である池宮英才邸と園部順夫（1935～1996、元明治学院オルガニスト）邸に存在したり、当時の関係者からの提供を受けたりしたものである。歴史資料館ではすべてデジタル化したため、希望者は実際に聴いてみることも可能である。

最近、安部正義のアメリカ留学時代の資料や、葬儀の式次第などの発見が報告された。このように新しい資料の発見は、今も断続的につづいている。

■ 『資料集』 刊行から レクチャーコンサートへ

正直、私の予想を上回る結果であり、「これほどの多くの関連資料が残っていたとは！」と思ったのも事実である。そこでこの「日本最初のオラトリオ」という記念碑的作品の存在をあらためて世に問うべく、資料集を作成することとなった。

2012年4月『明治学院歴史資料館資料集 第

9集－JOB An Oratorio』が刊行され、4本の論考とともに、《ヨブ》全曲の楽譜（声楽とピアノ伴奏用）が完全掲載された。付属資料として



明治学院チャペル全曲初演の録音CD（1967年5月収録）も添えられ、楽譜を見ながら演奏CDを楽しめる資料として、各方面から好評を頂いている。

音楽は、演奏のなかで時間とともに消えてゆく「瞬間の芸術」である。つまり、音楽は「演奏」されることで初めて完成に至り、「体験」を伴わないと実感できない。一方《ヨブ》は、演奏に約2時間を要する大作であり、あまり気軽に聴くことのできる作品ではない。ならば、解説を加えながら、《ヨブ》の音楽をハイライトで紹介しよう。こうした検討を経て、2012年11月に《ヨブ》の「レクチャーコンサート」が開催された。

講演と演奏の指揮は安積道也氏にお願いした。安積氏は1996年3月に本学文学部心理学科（現心理学部）を卒業後、音楽の道を志してドイツに渡り、8年におよぶ勉学の末、音楽家のための国家試験で最上級の「ドイツ国家演奏家資格A級」を取得している。現地では指揮者として100名を超える合唱団員やオーケストラ団員を相手に、ドイツ語で矢継ぎ早に指示を出し、演奏を統括していたというつわもので、今回の公演にはまさに打って付けの人物であった。2008年に帰国し、現在は西南学院音楽主事として、福岡を中心に指揮者、オルガン奏者として活躍され、『資料集9集』の執筆者の一人である。

報告記に記したが、当日は250人の来場者があり、終演時には感激のあまり涙を流す方もおられた。この成功の立役者は、安積氏とともに真摯に演奏に取り組んでくれた6名の若手・中堅の出演者たちであり、心から感謝を申し上げたい。また、かつて1967、69、75年の《ヨブ》公演に出演したグリークラブのOB・OGも多数来場し、旧交を温める機会ともなった。

来場者アンケートは45枚を回収し、全体の約20%という高回収率。おそらく当日の内容が、来場者の関心に見合っていたからだと思い、資料館スタッフ一同、手ごたえを感じた。

■ 今後の展望

《ヨブ》の存在を学問の場でも認知させることが重要と思い、昨年、キリスト教礼拝音楽学会の第12回大会（5月福岡）・日本基督教学会の第60回学術大会（9月東京）・日本音楽学会の第63回全国大会（11月京都）と、3つの学会で《ヨブ》に関する発表を行った。

日本最初のおラトリオが、明治学院で誕生したという、これまであまり知られていなかった事実に好意的な反応をいただき、フロアーから《ヨブ》に関する資料の提供を申し出る方が現れ、思いがけず収穫を得ることもあった。

私が、音楽学を学んだ芸術学科は1990年に開設された、学院のなかでも比較的新しい学科である。その初期の出身者として、学院史の知られざる功績にスポットを当て、それを学問の世界に還元できたことは、学院に対しても僅かばかりの恩返しになったのではないかと内心で充実感をかみしめている。

安部正義や《ヨブ》に関する研究はスタートを切ったばかりであり、これからの課題も多い。そして、私が一番の重要な課題と思っているのは「フル編成による《ヨブ》全曲の再演」である。音楽は「演奏」を持って完成に至る芸術である以上、この課題は避けて通ることはできない。次は、ぜひ何かしらの形でオーケストラ付きの全曲演奏が実現することを願っている。

歴史資料館・加藤 拓未

＝ 安部正義の曲の著作権について ＝

安部正義の曲の著作権については、ご遺族の意向でJASRACではなく明治学院資料館が委託され管理しています。演奏や譜面のコピーなどの許諾は資料館までご連絡ください。通常の演奏は、パンフなどをお送りいただければ無料で許諾する方針です。

TEL:03-5421-5170

【安部正義碑文谷教会資料】—新規関連寄贈

日本キリスト教団碑文谷教会 大三島義孝様より寄贈

資料名	発行	資料種別	資料年
作曲・安部正義《オラトリオ・ヨブ》1967/5/21 初演プログラム 明治学院チャペル		演奏会プログラム	1967
作曲・安部正義《オラトリオ・ヨブ》1969/5/26 東京文化会館 演奏プログラム		演奏会プログラム	1969
安部正義東北学院成績証明・推薦状	東北学院		1925
安部正義ニューイングランド音楽院資料			1926
安部正義前夜式 1974/6/4	碑文谷教会	式次第	1974
故阿部正義密葬 1974/6/5	碑文谷教会	式次第	1974
故安部正義葬儀次第 1974/6/9	碑文谷教会	式次第	1974
故安部正義納骨式 1974/6/10	小平霊園	式次第	1974
安部正義追悼1周年記念会 1975/6/1	碑文谷教会	式次第・挨拶	1975
安部正義 11周年安部雨柳 13周年追悼記念会 1985/2/24	碑文谷教会	式次第	1985
故安部雨柳葬儀次第 1972/12/5	碑文谷教会	式次第	1972
安部雨柳埋葬式次第 1973/4/15	小平霊園	式次第	1973
安部ウリウ追悼1周年記念会 1973/12/1	碑文谷教会	式次第・挨拶	1973
故安部ウリウ前夜式次第 1972/12/2	碑文谷教会	式次第・挨拶	1972

新着資料：中川嘉兵衛と中川愛咲資料が寄贈

この資料は、本学名誉教授大島貞夫先生（社会学部・臨床心理学）との親交のあるお二人より寄贈を受けました。松岡正治様は氷業を継いだ中川嘉兵衛の長男中川佐兵衛のひ孫であり、中川嘉雄様は次男中川愛咲の孫です。

お二人とも両人の資料をお持ちでしたが、ヘボン博士と親交があり氷業の祖と言われる中川嘉兵衛関連の資料の多くは松岡様より、築地大学校卒業後ヘボン博士の紹介状を持ってクララ夫人とともに渡米して留学し、細菌学者となった中川愛咲の資料は中川様よりいただきました。特に中川愛咲資料はヘボン夫人と渡米した旅券や、学位記など豊富な一次資料を含みます。

過去の白金通信掲載の中川嘉兵衛や愛咲についての記事は、大島貞夫先生の指導により書かれました。香取國臣編『中川嘉兵衛伝—その資料と研究—』1982年 関東出版社には歴史資料館の秋山繁雄氏が「ヘボン博士周辺のひとびと」を執筆しています。

ご寄贈いただいたご両人に心よりの感謝を捧げるとともに、中川嘉兵衛と中川愛咲の紹介と資料目録を掲載します。なお、目録は嘉兵衛と愛咲に分けて分類いたしました。

歴史資料館 事務局



氷業の祖

中川 嘉兵衛

なかかわ かへえ

1817年～1897年

1817年（文化14）1月14日三河国額田郡伊賀村（現愛知県岡崎市）に生まれる。16歳のとき京都に出て、巖垣松苗翁の門に入り漢学を修める。横浜開港を好機に、40歳にして単身江戸に出てイギリス公使館のコック見習いとなった。

各国の公使館員はヘボン医師の治療を受けており、嘉兵衛もヘボンのもとへ出入りするようになる。嘉兵衛は維新前後に大病を患い、ヘボンの治療を受けた。間もなく全快したので、礼を述べにヘボン宅を訪ねると「あなたの病気は治りました。心配ありません。だが、もうひとつ病気が潜んでいます。それはあなたの気づかない恐ろしい難病です」と言われる。嘉兵衛はとても驚き、顔はみるみる青ざめていった。「それは心の中の病気です。私には治せませんが、ここに古今無類の良薬があります」といって書棚から渡されたのが漢訳の聖書だった。

1874年（明治7）7月、下岡蓮杖とともにジェームス・バラから洗礼を受ける。横浜の海岸教会での最初の受洗者であった。

海岸教会人名簿には東北学院院長・押川方義、明治学院総理・井深梶之助、青山学院院長・本多庸一、日本基督教会の大立者植村正久などの名前がある。嘉兵衛の欄には1896年（明治29）10月12日に東京築地の新栄教会への転会もつけ加えられている。この新栄教会は横浜の海岸教会とは深い関係があり、海岸教会はもと横浜日本基督公会と呼ばれ、1872年3月10日に設立した。ここで洗礼を受けた東京在住の人たちを中心にして東京築地明石町六番館で教会を設立したのが東京公会で、後に新栄教会となった。

新栄六十年史によると、嘉兵衛の次男愛咲は1886年（明治19）に同教会の執事になり、日曜学校でも教えている。嘉兵衛は「彼は長老でもなく執事でもなかったが一個の平信徒としてよく教会のために尽くした。教会の財力極めて微弱であった当時に於いて、彼はしばしば私財を投じて礼拝堂の修繕をなした。又伝道その他の事業に献金して後顧の憂をなからしめた。それでも少しも高ぶることのない恭謙篤実の基督教的紳士であった。其の信仰の堅実なる今もなお彼を模範的基督者として尊敬している老信徒が少なからず」と記している。嘉兵衛は単に自分の所属する教会のみならず、地方に災害があった時など義損金を出している。

中川嘉兵衛は、福澤諭吉から「世の中が開ければ、だれもが牛乳を飲んだり、牛肉を食うようになる」と教えられ、東京芝白金に初めて屠牛場屠殺場を設け、次に牛乳屋・牛肉屋まで開業した。

親交のあったヘボンからは「氷は食べ物の保存に大いに役立ち、また医療用の効果も大である」ことを聞いて、なんとか氷を安く一般に供給できぬものかと日夜研究にはげんだ。当時、氷は横浜に居留する外国人の飲料品や食肉保存用として利用され、外国人医師が治療用に利用する場合もあった。この氷は主にアメリカのボストン周辺の天然産のもので、長時間の航海輸送のために目減りが激しく氷の価格は非常に高価であった。

1861年（文久元）国内最初の採氷を富士山麓において試みたが失敗。1863年には信濃国諏訪湖で試み、1864年には下野国日光、さらに1865年には陸中国釜石、翌年には青森埋川など場所を代えて氷を採り、横浜へと運搬したがいずれも失敗する。1867年には函館に渡り採氷場を設けたが、結氷時季に温暖であったため、わずかの成品を得ただけで損失に終わってしまう。資金は欠乏し、窮境に陥った。

しかし失敗が重なるほど闘志と情熱が高まり、ヘボン師の強い激励もあって、全財産を投げ出す覚悟で製氷に取り組んだ。

そして1869年（明治2）、ついに五稜郭の外壕で初めて天然氷約500トンの採氷に成功する。五稜郭の外壕の水質は極めて清冽で、そのうえ函館港が近いので運搬に便利であった。

1871年の夏に五稜郭産の氷（函館氷）が京浜市場に登場しはじめ、この年の移出量は670トン、翌年には1061トンと産出量もほぼ倍増した。これらはいずれもイギリス、アメリカの外国商船で横浜に輸送された。新池の開削費や京浜地方への運賃、市場でのボストンアイスカンパニーとの販売競争、暖冬、大風などの自然条件による被害で企業的には辛酸をなめた。しかし開拓使の資金援助をとりつけ、米国から伐氷機を購入して品質の向上を計り、ついにボストン商会の氷の駆逐に成功した。



五稜郭産の氷切出

1881年、第2回内国勸業博覧会に五稜郭の氷を出品して賞牌を受けた。その賞牌の表面に龍の紋章を附したことから「龍紋氷」と呼ばれ、函館名産に成長した。

晩年、時代が天然氷でなく機械製氷になりつつあることを見て、その計画をすすめたが1897年（明治30）1月4日東京・越前堀の自宅で没した。八十歳であった。念願の機械製氷株式会社は、長男の中川佐兵衛が代表となってこの年設立された。

嘉兵衛はパンの製造、牛乳・牛肉の販売、天然氷の製造販売のほかに、新潟の臭水油が石油であることの証明、北海道の林檎栽培、鱈の肝油製造などを創始している。

新潟の石油事業については、明治政府の殖産興業奨励の要請に答えて、岸田吟香、久須美秀三郎とも協力していたといわれている。油田地質調査願には米国人某氏を招へいし、油田を深見したいとあった。当時は石油のことを臭水油と呼び、新潟の石油の品質を検査してもらうために見本を米国に送っていた。その中立ちがヘボンであったといわれている。

1887年には上野公園で北海道産のビールを販売、1879年には北海道の物産を東京方面に送り出す大取次店の権利を北海道庁から受け、東京箱崎で物産展を開いている。

また日本人のパン屋第一号は、1860年横浜の本牧に開店した野田兵吾といわれているが、つづいて元町に開店した嘉兵衛の中川屋のほうが有名だったという。

日本の新聞広告の第一号を出した人としても知られる。掲載誌は1867年1月創刊の「万国新聞」で、イギリス領事館付宣教師ペーリーの翻訳新聞。

「パン ビスケット ボトル 右品私店に御座候間多少に寄らず御求被成下度奉願候 横浜元町一丁目 中川屋嘉兵衛」とある。

そのほかにも図解入りの牛肉の広告を出すなどした。

中川嘉兵衛は青年時代に尊王愛国の思想を学び、壮年でクリスチャンとなり博愛仁慈の心を深め、事業を金儲けよりも国益に資することを第一とした明治の商人であった。



へボンの紹介状で 留学

中川 愛咲

なかがわ あいさく
1867年～1921年

中川愛咲は1867年（慶応3）9月6日、中川嘉兵衛の二男として北海道函館で生まれ、横浜と東京で育った。1878年11歳の時、タムソン師より洗礼を受けてキリスト教徒となり、13歳で東京・築地にあった築地大学校に入学し、へボン塾直系の一致英和学校を18歳で卒業した。（「目でみる百年史」卒業写真掲載 中川愛咲・馬場銚作）

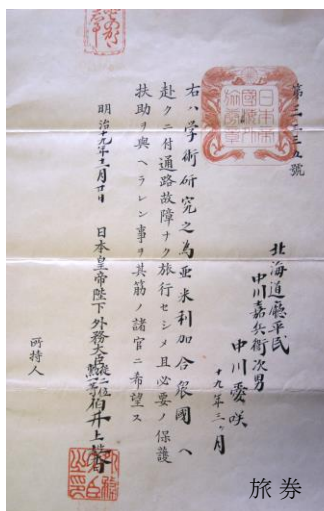
中川嘉兵衛は長男佐兵衛を「商」の道に、二男愛咲を「学」の道に進ませたいと考え、愛咲の教育と生活は嘉兵衛、佐兵衛と受継いで面倒をみることにした。

1886年（明治19）12月20日19歳の時、へボン夫人クララがアメリカに一時帰国する時に同道し、へボンの紹介状を持ってへボンの母校であるプリンストン大学に留学した。

へボンは神学を学ぶことを期待していたようであるが、愛咲は予定を変えて理学部に入学した。

横浜の中川家はへボン邸の谷戸橋を挟んだ向かい側にあり（港の見える丘公園フランス山入口付近）、信仰でも仕事の上でもへボンと交流があった。

1887年5月、ニュージャージー州プリンストン大学から Special Student として入学二年後、1889年に理学部を卒業し理学部の学位を授与されている。プリンストン大学を卒業後、ニューヨークにあるコロンビア大学医学部に入学し、1889年9月から1891年4月の二年間在籍した。1892年4月に25歳でニューヨーク市立大学医学部を正規に卒業し、医学士の学位を授与されている。



エデンボルグ大学では病理婦人科を学んだ。さらにニューヨーク市立大学とライプチヒ大学で外科・皮膚科・精神科、ウィン大学で細菌・内・耳鼻科を研究し、ベルリン大学へ行って外・内・小児科を学んだ後、1893年10月26歳の時に帰国した。

帰国直後、内務省から医術開業免許を取得し東京・京橋区南鍋町一丁目八番地で開業した。愛咲は六尺（約180センチ）も背丈があり、西洋人的な風貌の持ち主であった。そのため洋行帰りの若先生と大変に人気があり、大繁盛したようである。

1895年28歳の時に、私立伝染病研究所で北里柴三郎所長の助手を務める。1896年9月6日には、「伝染病研究所 助手ドクトル中川愛咲 編纂」の『伝染病研究講義』という細菌学の教科書が、東京・南山堂から発行されている。伝染病研究所は、1894年から研究制度を設け伝染病の学理と先端技術の普及を目的として、全国から公募した医師を対象に講習会を開催した。この時北里柴三郎所長自身が講習会で講義した内容をまとめ、テキスト用に編纂したのが助手・中川愛咲である。『伝染病研究講義』は、本文120頁と写真50頁からなる。

また仙台に赴任するまでの三年間に、英文27頁の総説『ペスト』（北里柴三郎と共著）を著している。英文の『ペスト』（Plague）は、T・L・ステットマン編集による1898年発行の『20世紀の医療、現代医科学』二〇巻の第15章「伝染病」（640頁）の325～327頁に及ぶ、当時のペストに関する大総説である。

北里柴三郎と袂を分かったのは、顕微鏡レンズの研究をめぐって援助資金を求めたが拒否されたことで意見が対立したからとある。父嘉兵衛の大日本製氷俵の大株主である愛咲に比べ、北里はある意味で浪費的な面もあった。当時、北里は新橋の名妓ポンタを伊藤博文と争っていたといわれている。

『無駄に使う金はあるのか』となじり、1898年に伝染病研究所を依願退職した。同年9月に第二高等学校医学部の衛生学と法医学の講師として着任し、1899年に教授に昇任した。また、1902年から細菌学が正規に取り上げられた時、細菌学の教授にも任命された。愛咲が仙台に就任して三年後に、医学部は第二高等学校から「仙台医学専門学校」として独立した。

中川愛咲はドイツ留学を終えて帰国の際、幻

燈機を購入する。高価であったため会計係から苦情をいわれ、「わたしの俸給から差し引いておけ」と言ったと伝えられている。幻燈機を使って細菌の状態を説明し、時間を余ると日露戦争の時局に関する幻燈を上映した。

日露戦争での中国人銃殺場面を見る生徒の中には、清国からの留学生・周樹人(後の魯迅)がいた。「幻燈が映されると観ている学生から万歳と拍手が沸き起こった、『ここに中国人がいるぞー』と叫びたかった」(魯迅『藤野先生』)。

その情景に「中国人を救うのは医学による治療ではなく文学による精神の改造だ」と考えさせられた魯迅は、医学の勉強をやめて文学に転

向し文豪になったといわれている。

中川愛咲は東北帝国大学が創立された1907年、40歳の若さで突如として仙台医学専門学校を退職した。神奈川県大磯町に引退したのは、妻光(みつ)の結核療養のためと思われる。雪の仙台よりは暖かい大磯町で結核を患う妻の看病に専念することを選んだのかもしれない。長男の嘉一郎と長女の菜莉は家族から離され、学寮に入れられた。

1921年庭の梅の木を剪定中に眼を傷つけ、東京・神田の眼科の名医に診てもらうが、治療の効なく敗血症になって死去した。

享年53歳であった。

中川嘉兵衛 関係資料目録

資料名	資料年月日	形状	資料種別
日本冷蔵株式会社二十五年の歩み	1973/12/25	B5版	図書
日本冷凍史	1975/12/20	A5版	図書
日本水産の70年	1981/5/31	A4版	図書
ビールと日本人 明治・大正・昭和ビール普及史	1984/8/10	A5版	図書
日本石油百年史	1988/5/10	B5版	図書
サッポロビール120年史	1996/3/10	B5版	図書
創元設計資料『氷業の祖 中川嘉兵衛伝』	2000/3/9	B5版	図書
友野宏弥書簡 海岸教会会員名簿第一号 中川嘉兵衛 明治7年7月バラ師より受洗の記録あり	1977/11/26	A4版	一次
友野宏弥書簡 香取綾子遺稿集「静けき祈り」について	1981/10/12	A4版	一次
香取國臣原稿 福沢先生と横浜(高島学校)牛肉と氷	1982/3/27	A4版	一次
香取國臣原稿 成島嘉一郎著「天然氷」の扉に	1982/7/3	A4版	一次
香取國臣書簡 助野健太郎先生 秋山繁雄先生のテープ郵送について		A4版	一次
香取國臣筆跡 中川家系図		A4版	一次
香取國臣より松岡正治宛 私信1通 中川家系図		A4版	一次
平一より香取國臣宛 私信1通 (極楽寺の写真同封)		A4版	一次
新行和子書簡	1981/9/31	A4版	一次
新行和子書簡 岡崎市史編纂用資料		A4版	一次
ヘボン博士周辺の人びと-中川嘉兵衛と岸田吟香 秋山繁雄	1982/10/20	A4版	一次
中川家系図 中川嘉兵衛 札幌リンゴ園経営の件	1982/11/29	A4版	一次
中川家先祖 菩提寺 岡崎 極楽寺 調査の件 中川嘉兵衛墓表 極楽寺の写真	1982/11/29	A4版	一次
中川家系図	2000年頃	A4版	一次
中川家系図 内田清二郎制作 中川嘉兵衛、妻隆子、長男佐兵衛、二男愛咲について (付-ヘボンと北里柴三郎について、および中川嘉兵衛と内田との関係)		A4版	一次
中川嘉兵衛と其一族		写真	一次
皆川恵男書簡 日本古書通信 氷業資料余話 -先覚者 中川嘉兵衛翁 東京 盛大氷店一覽表		A4版	一次

資料名	資料年月日	形状	資料種別
中川嘉兵衛 肖像画 8 枚-長尾 己画伯筆		A4 版	一次
松岡正治筆 嘉兵衛について聞いていること(原稿用紙 5 枚)		A4 版	一次
採氷事業説明書 附製氷沿革附記		A4 版	一次
五稜郭伐氷園 (複製)		写真	一次
新栄教会六十年史より	1933/11/30	B5 版	二次
東北大学五十年史(上)	1960/1/10	A4 版	二次
食生活近代史-食事と食品- 牛鍋屋	1969/6/20	B5 版	二次
朝日新聞 キャッチフレーズにみる新聞広告の歴史 赤塚行雄	1972/10/7	A3 版	二次
天然氷 成島嘉一郎著	1973/7/11	A4 版	二次
トーマス・W・ブラキストン伝 コピー	1979/5/31	B5 版	二次
中川嘉兵衛 資料コピー 早稲田大学図書館より	1981/10/17	B5 版	二次
白金通信 第 155 号 ヘボン博士周辺の人	1981/11/1	A3 版	二次
第七回ヘボン博士講演会における横浜開港資料館での講演内容 ・「中川嘉兵衛のこと 家系、略伝」松岡正治著 ・「ヘボン博士周辺の人びと 中川嘉兵衛と岸田吟香」秋山繁雄著 ・「先祖中川嘉兵衛とヘボン博士」松岡正治著 ・「本邦における天然氷事業」亙理信一著	1982/10/18	A4 版	二次
読売新聞 江戸から昭和へ 東京の史跡を歩く「氷」	1985/8/26	A3 版	二次
「ヘボンの時代を語る会」案内	1988/8/26	A4 版	二次
東京銘醫大見立表	1883/10/10	A4 版	二次
フルベッキの聖書翻訳と伝道	1891	A3 版	二次
女学雑誌	1897/7/10	A4 版	二次
「公開経営」続・商人ものがたり はじめて広告を出した男 上下	1990/ 11~12	A4 版	二次
「植村正久と其の時代」第一巻 「植村正久と其の時代」第五巻 「白金学報」1907 年 13 号 P103-4 「白金学報」第 32 号 P6		A4 版	二次
第七節 官許牛肉の由来・第八節 食肉業の展開 第十一節 白金と場の開設と御養生牛肉 第十二節 中川嘉兵衛の偉業と興廃		B5 版	二次
人間ひろば記事 「先祖中川嘉兵衛とヘボン博士」 冷凍 2001 年 6 月号 「時代を超えて(1)」		A4 版	二次
日本石油史(日石 70 周年記念号)		A3 版	二次
中川嘉兵衛略伝 中川嘉兵衛墓表、訳文		A4 版	二次
松岡正治より中川嘉雄宛 冷凍の沿革 牛鍋とライスカレー 山本夏彦著		A4 版	二次
舶来事物起原辞典 富田仁著		A3 版	二次
北越石油業発達史 2 巻 日本石油史 日石 70 周年記念 2 巻		A3 版	二次
ヨコハマ洋食文化事始め 西洋食文化の啓蒙に当たった人物と出版物		A4 版	二次
明治事物起原 下巻		A3 版	二次
「冷蔵庫のご先祖は富士山」記事		A3 版	二次
函館「五稜郭」で天然氷切り出さる 記事		B5 版	二次
日本冷凍史(2)		A3 版	二次
日本冷凍史(3)		A4 版	二次
日本冷凍史(4)		A4 版	二次

中川愛咲 関係資料目録

資料名	資料年月日	形状	資料種別
中川愛咲 旅券・同コピー	1886/12/20	A3 版	一次
成績表 Edinburgh 大学	1891	B5 版	一次
学位記 Edinburgh 大学	1891 夏	130×230	一次
成績表 聴講学生	1892/10~ 1893	A3 版	一次
学位記 Leipzig 大学	1892/7	A3 版	一次
伝染病研究所講義出扱二付契約書 2 枚	1895/11/27	A3 版	一次
伝染病研究所講義計算第一回報告書	1896/12/19	A3 版	一次
辞令「依願免伝染病研究所助手」	1898/9/10	A4 版	一次
履歴書 中川愛咲	1898/9	A4 版	一次
辞令「任第二高等学校教授」山県系有朋	1899/4/27	A4 版	一次
学校衛生学講義ノート 学士中川愛咲士講述	1900/8	A4 版	一次
約定書（中川愛咲著 学校衛生学について） 藤崎書店主 藤崎祐之助より中川愛咲宛	1900/10/23	A4 版	一次
辞令「陞叙高等館四等」桂太郎	1904/12/20	A4 版	一次
辞令「叙正六位」田中光顕	1905/2/20	A4 版	一次
辞令「依願免本館」西園寺公望	1907/10/24	A4 版	一次
亘理信一より香取國臣宛 私信 1 通	1982/11/8	A4 版	一次
中川愛咲 写真		130×180	一次
中川愛咲 関係資料 大島より中川嘉雄宛 私信 1 通		A4 版	一次
高等官席次	1901/7	A4 版	二次
東北医学会会報	1901/12/19	A4 版	二次
俸給月額現計表 仙台医学専門学校	1907/9/30	A4 版	二次
写 辞職願	1910/10/10	A4 版	二次
日本基督 新栄教会六十年史	1933/11	A4 版	二次
東北大学五十年史 上	1960/1/10	A4 版	二次
明治学院大学史料編集室 秋山繁雄より中川嘉雄宛 私信 1 通	1977/11/19	A4 版	二次
中川嘉兵衛について 原稿	1977/11/29	A4 版	二次
白金通信コピー3 枚 スポットライト学院人間史	1979/8	A3 版	二次
大島貞夫より中川嘉雄宛 私信 1 通 愛咲の入学届コピー 2 通	1981/8/24	A5 版	二次
白金通信 へボン博士周辺の人 製氷業の元祖 中川嘉兵衛	1981/11	A3 版	二次
インフルエンザ菌:誰が最初の発見者か 田口文章・滝龍雄・会田恵著	1995/3/6	A4 版	二次
セリフのないドラマー破傷風菌純培養の成功の陰に忘れられた大発見ー 田口文章・会田恵著	1997/3	A4 版	二次
中川嘉雄より松岡正治宛 私信 1 通 中川愛咲 経歴(中川嘉雄制作資料)	2000/1/20	ハガキ A3 版	二次
日本醫事新報 仙台医学専門学校の初代細菌学教授・中川愛咲(上)	2001/10/6	A4 版	二次

紙 両 な	資料年月日	形状	資料種別
北里大学 田口文章より松岡正治宛 私信 1 通(複写)	2001/11/19	A4 版	一次
「仙台医学専門学校 <small>の</small> 初代微生物学教授・中川愛咲」について 田口文章より私信 1 通(複写)	2002/11	A4 版	一次
白金通信 ヘボンが育てた医学の人々記事 大島貞夫	2011/11	A3 版	二次
第二高等学校一覧 自 1897 年 至 1898 年 科目教員部分コピー 第二高等学校一覧 自 1899 年 至 1900 年 科目教員部分コピー 第二高等学校一覧 自 1900 年 至 1901 年 科目教員部分コピー 第二高等学校一覧 自 1902 年 至 1903 年 科目教員部分コピー	1898~1903	A4 版	二次
第二高等学校一覧 自 1903 年 至 1904 年 科目教員部分コピー 第二高等学校一覧 自 1905 年 至 1906 年 科目教員部分コピー	1904~1906	A4 版	二次
中川愛咲についての資料 4 枚		A4 版	二次
中川愛咲の経歴		A4 版	二次
愛咲 渡米から帰国 伝染病研究所 退職まで		A4 版	二次
診断書コピー(病名 神経衰弱)		A4 版	二次
築地 明石町今昔 北川千秋著		A4 版	二次
日本基督 新栄教会六十年史 目次 コピー2枚 17~18頁、51~52頁		A4 版	二次
暮らしとパソコン:江戸東京重ね地図 第12回 花のお江戸は銀座でござる		A4 版	二次
会田恵より中川嘉雄宛 私信 1 通		A4 版	二次
大島貞夫より中川嘉雄宛 私信 1 通 その他 私信 2 通		A4 版	二次
松岡正治より北里大学 田口文章先生宛 私信 1 通		A4 版	二次
仙台医学専門学校の初代細菌学教授		A4 版	二次
藤井省三より松岡正治宛 私信 1 通 鲁迅と仙台医学専門学校コピー5枚		A4 版	二次
鲁迅の仙台時代-鲁迅の日本留学の研究 阿部兼也著 東北大学出版会		A4 版	二次
細菌学者 中川愛咲 東北地区初代細菌学教授 目次		A4 版	二次
1. 渡米前期		A4 版	二次
2. 留学時代		A4 版	二次
3. 伝染病研究所時代		A4 版	二次
4. 仙台時代		A4 版	二次

新着資料紹介

展示用
レプリカ

明治学院 150 年にあたり、貴重な資料を持つ所蔵館に対して特別な許可を求め、レプリカ（展示用複製）の許可をもらうことができ、製作しました。

『ヘボン手術図』

武田科学振興財団 杏雨書屋蔵

ヘボンが 1867 年（慶應 3）当時の人気歌舞伎役者であった沢村田之助の下腿を切断する手術を描いた肉筆の錦絵です。錦絵には明治 2 年と書かれています。杉立義一氏の所有でしたが、現在財団に寄付されています。執刀医ヘボンの助手としてのシモンズも描かれています。田之助はこの後米国製の義足をつけて舞台に立ちました。この話は菊池寛・船橋聖一・南条範夫など多くの作家が題材としています。

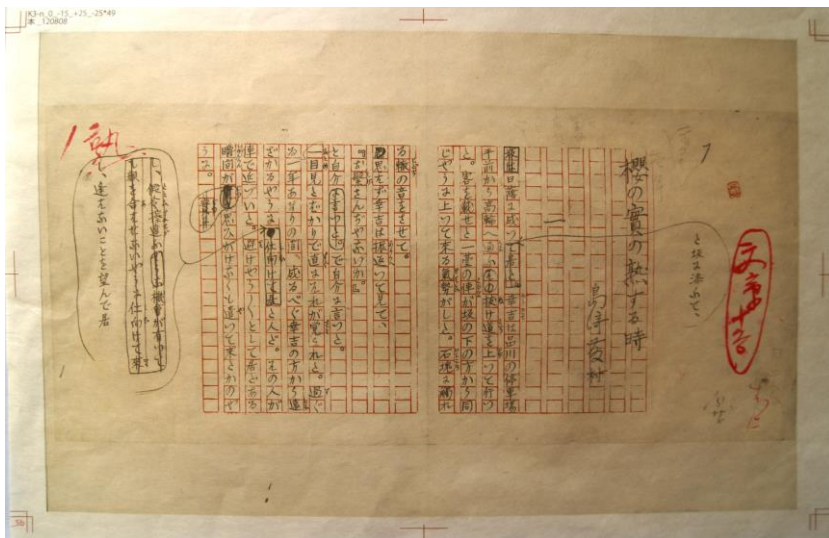


島崎藤村 原稿 『桜の実の熟する時』

天理大学図書館蔵

島崎藤村の明治学院の学生時代を中心に書かれた自伝的小説の原稿です。

現在の新潮文庫版『桜の実の熟する時』は、注釈として作品中に登場する建物や人物の実名と解説が付けられています。



ヘボン塾 写真

いままで、オリジナル写真は明治学院にはありませんでしたが、今回2点入手できました。

1870年撮影『横浜谷戸橋へボン住居を望む』

Michael Moser 撮影



横浜で John Reddie Black により、1870年5月発行の英字新聞 FarEast7月号に掲載された1枚です。湿板により撮影され、鶏卵紙に密着焼された写真であり、月刊新聞に貼り付けられました。新聞での写真解説は“The First Bridge, Yokohama”です。へボン邸横の谷戸橋がかかる運河は、横浜居留地を長崎出島のように囲うため掘削され、最初の橋として谷戸橋はかけられました。

1870年はへボン塾の最盛期ともいえる時期であり、フェリス女学院の創始者であるキダー女史がへボン塾に雇われた年でもあります。湿板は多数の焼付けができないため、何台かのカメラを並べて撮影したようで、わずかに撮影アングルの異なる写真が存在します。

『グランドホテルとへボン邸』



鶏卵紙写真を台紙に貼り、手彩色したもので「横浜写真」の一枚です。

へボン邸向かいの寺院増徳院からのアングルで撮影、グランドホテルには煉瓦造りの新館が増築されています。谷戸橋の鉄橋化は1887年（明治21）であり、そのころに撮影されたと推定されます。

その他の寄贈資料

① 明治学院大学山岳部小堀一政様より

「ヌン・東稜 1978」・50年史記念号「ザイル」

② 牧野匡道様より

「1965年中学卒業記念品 ヘボンバックル」・

「ヘボン館講堂記念ヘボンメダル」・「1965年中学卒業アルバム」



歴史資料館の展示場所

変わりました！

すでに学内の方は気がつかれていると思いますが、歴史資料館の展示の場所を変えています。

▽常設展 白金校舎本館2階

創設者ヘボン・ブラウン・フルベッキに関する展示

▽企画展 記念館2階歴史資料館

時々の企画展示を中心に展示

2012年、初夏から変更しました。

本館2階は自動販売機もベンチもあり、いままで資料館に足を向けなかった学生たちもたくさん見てくれています。時間に関係なく展示できますので、休暇中や施設外部貸出をしている土曜・日曜も多くの人が見ることができるようになりました。展示の感想も多くの方にお声をかけていただきました。好評でありこの展示場所替えは大変良かったと考えています。

この先明治学院150周年に向けては、資料館展示室は記念館の1階に移転し、本館2階と合わせてさらに展示を強化していく予定です。いままで記念館の2階への階段はお年を召した方には厳しく、車いすの方は運び上げるなどして大変ご迷惑をかけました。記念館1階へ移動により、本館2階は「常設展」、記念館では「企画展」とあわせて明治学院の歴史を年表と創立系統図に留まらない「学校史（常設）展」として展示運用していく方向を目指します。

他の博物館などへの協力

● 「島崎藤村展—生誕140年記念」神奈川県立近代文学館

2012年10月6日から11月18日 三宅克己+島崎藤村画賛 他写真3点

● 「明治の傑人 岸田吟香 ～日本で初めてがいっぱい！目録・新聞・和英辞書～」

豊田市郷土資料館 2013年2月2日から3月10日精錡水看板など

● 新聞・放送への協力

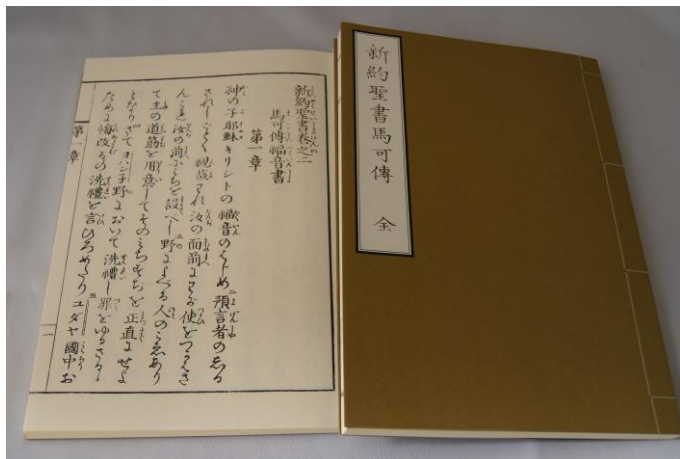
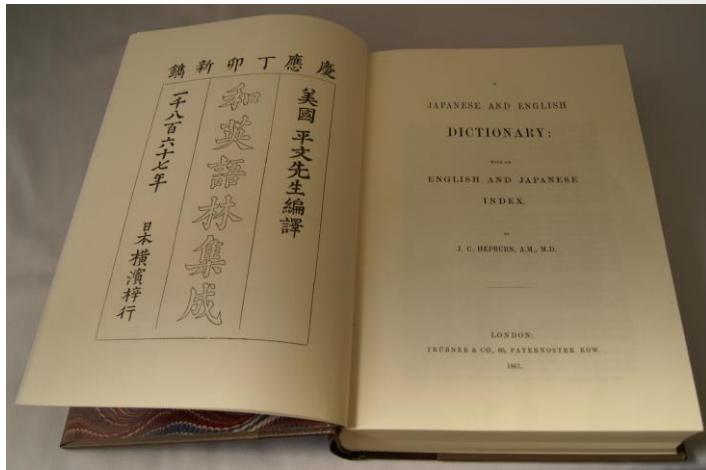
東京新聞 2012年5月31日「つなぐ」 / 読売新聞 2012年6月22日「タイムトラベル」 /

信濃毎日新聞 2013年2月3日「東京の信州—明治学院記念館」 /

テレビ朝日 2012年10月「文化財ウィーク 2012」 / NHK国際 2013年2月「TOKYO EYE」

歴史資料館制作 復刻版

J. C. ヘボン 『和英語林集成』 初版ロンドン版



ヘボン S. R. ブラウン 『新約聖書馬可傳』

資料館よりお知らせ

- 「ヘボンと幕末・明治(仮称)」展が横浜開港資料館で開催されます。
明治学院が共催、資料館と図書館も出品して展示会が開かれます。同時に明治学院図書館主催の展示や各種行事も現地で開催されます。
2013年10月18日(金)から12月27日(金)まで
- 『明治学院150年史』発行予定
「学校法人明治学院150年史編集委員会(中島耕二委員長)」では、通史編と課題編に分け、2013年10月半ばの完成に向けて編集中です。

発行者：明治学院 歴史資料館・発行年：2013年5月1日
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話・FAX：03-5421-5170
E-mail:siryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp

歴史資料館ホームページも是非ご覧ください
<http://shiryokan.meijigakuin.jp/>

